

「木とその実」という小標題が掲げられます。先週学びました22-32節では、群衆の「この人はダビデの子(メシア)」という告白と、ファリサイ派の「悪霊の頭」という非難から始まり、「言い逆らう者」についての裁きで終わっています。31節で「人が犯す罪や冒瀆は、どんなものでも赦される」と記される通り、すべての罪は赦されるという生き生きとしたイエスの宣言(福音)と罪人と共に生きたイエスの生きざまが伝えられています。

しかし、このことに反して「“霊”に対する冒瀆は赦されない」と続けてマタイは記しました。この矛盾は何なのでしょう。これはイエスの生前においては彼をメシアとして認めなくても赦されるが、教会の時代となった今、教会の存在根拠である聖霊を冒瀆する者は赦しから排除されねばならないことを明らかにするためでした。マタイはこのように赦されない「罪の範囲」を記してゆくのです。

これらの内容を受けて本日の箇所は二つの比喩から構成されています。「木と実」(33)と「倉とその中身」(35)です。これらの比喩の言葉は、当時ではごくありふれた日常使用の言葉であったようです。ここでは人の喋る言葉について用いられています。マタイは群衆にしるファリサイ派にしる、そして弟子たちにしる、人の口から出る言葉に重きを置いたようです。つまり、言葉とはイエスに対する告白か非難かという問いかけでもあったわけです。その言葉の内容が終末の裁きに決定的になることを強調したのかと考えられます。マタイによれば、言葉となって外に表れるものは決して口先だけのものではなく、人のこころに発するものであり、神はその言葉によって裁くというものです。それは神が表面的な言葉しか見ないというのではなく、人は悪であれ偽りであれ、それに対して責任が問われるということなのです。

現在のこの国では自衛隊の軍事力強化に向けての準備が着々と進められているといっても過言ではないでしょう。そして、段階的に憲法を改悪してゆく動きが加速度的に進んでいます。わたしたちの周りに「戦争しよう」などと言う

人が果たしているのでしょうか。少なくともわたしは知りません。なのに政府が推進する「いつでも戦争が出来る国家」とは何なのでしょう。誰が責任をとるといえるのでしょうか。

マタイはそのような人を食べ物にしか見ようとしないうことを「霊に対する冒瀆」(31)と呼び、ファリサイ派に代表される特権者や為政者に対して「蝮の子らよ」(34)と厳しく呼び掛けます。

そして、「あなたは、自分の言葉によって義とされ、また、自分の言葉によって罪ある者とされる」(37)と選択の余地を添えて問い直すのです。これが「罪の範囲」の規定なのです。

偏り行く政治を見回すと必ず汚職や献金等の金まみれの利害関係が浮き彫りにされます。飽き飽きです。しかし、わたしたちも人と交わっていると、教えられたり慰められたりします。でも、そういういわば利点に交わりの意味があるわけではありません。実は逆なのです。利害に毒されたわたしたちに、本来あるべき姿を取り戻してくれるのが自分の言葉なのです。利害を目的としない交わりを背景にして、わたしたちは命を与えられたものとして生き直すことが出来るのではないのでしょうか。

これがイエスが語る「自分の言葉」という自由への問い直しでしょう。